

する善導の著作中最も初期の作品であつて、四帖疏後の著作とはみるべきではない。本書をかくの如く位置づけることによつて、その念觀困亂の理由も肯けるし、舊來の不自然な解釋も解消せられる、のみならず諸傳に傳える善導自身の嚴しい實踐もまた理解することが出来ると思はれる。

天台四種三昧について

一行三昧と隨自意三昧

安藤俊雄

摩訶止觀に於て四種三昧のすべてが天台圓頓止觀の行として説かれたものであることは云ふまでもない。したがつて四種三昧の間に甲乙優劣の相異があるべき筈はない。けれども摩訶止觀第七重修章以下の論述内容と對照するとき、四種三昧の中でも常坐三昧（又は一行三昧）と非行非坐三昧（隨自意三昧）の二者が、最も正規且つ本格的な圓頓止觀の行として想定されてゐたことを知るのである。正修章は十境に對する十乘觀法の修行方法を論述するが、特に第一陰入界境に對する十乘觀の修行方法を説示するところに重點を置いており、その修行方法は第二煩惱境乃至菩薩境全體の規範たるべきものである。然るにその第一陰入界境についての觀法は第一端坐、第二歷緣の二段階に區分されるべきものとされてゐる。そして十乘觀は端坐の身儀に於て運用されるべき止修觀法である。十境の第二煩惱境以下の論述では端坐の正觀方法のみが説かれて、歷緣對境の説明を省略してゐるが、端坐と歷緣が一具であるといふのが摩訶止觀

の眞意である。これは天台大師の初期乃至中期間の講説や撰述を見ても同様であつて、例えば小止觀などでは、正修觀法を坐中正觀と歷緣對境、あるひは總觀と歷別觀の二段階に區分し、止觀を修行するものが、先ず端坐して實相を觀じ、然る後にはじめて行住坐臥を通じて六塵六作を觀ずべきものであると規定してゐる。端坐正觀と歷緣對境とが基本と應用との關係にあり、兩者が一具のものであるというのが天台大師の眞意である。してみると、四種三昧のなかで端坐を身儀とする常坐三昧、及び歷緣對境を特色とする非行非坐三昧が重要な意義をもつてゐることは明かである。

親恩感情の心理學的構造

調 圓 理

恩の體驗が恩感情である。その構造を明かにすることによつて、恩の實態を把握することができる。わたくしは昭和十五年十一月から同十六年二月までの期間に、「今までに最も有難いと感じたことをかきなさい」という問を出して、福岡縣三瀧郡大川町（現大川市）の小學校、舊制福岡縣立中學傳習館、舊制三瀧高等女學校、舊制佐賀高等學校の児童生徒に無記名で答をかかせた。こうして尋常小學一九八六、高等小學、女學校、中學校一五〇一、高等學校五七〇、總計四〇五七の答を得た。恩の種類を分類して、頻數の多い順に記せば、親、社會、君國、師、友情、友愛、道德、文化、宗教、境遇となる。親恩を書い